国立国会図書館月報

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN 2023.7/8

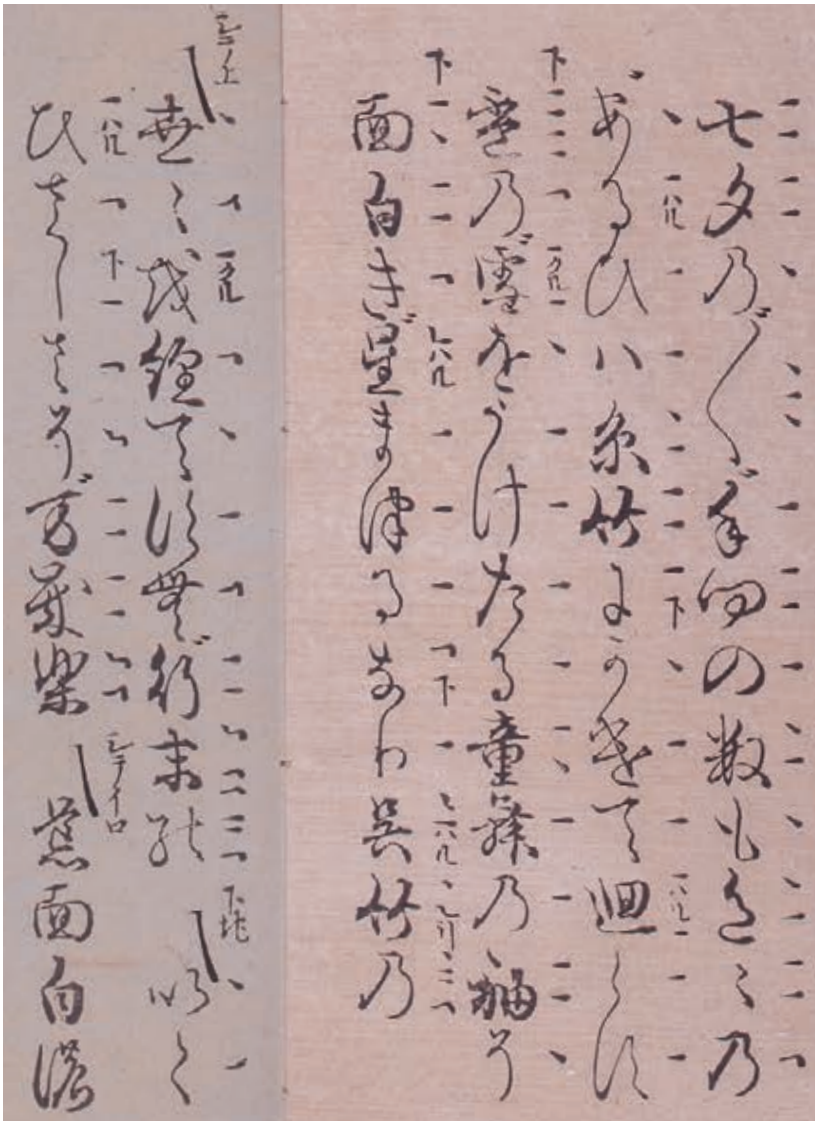
小特集　古活字版

嵯峨本とは何か　小秋元段

伏見版『六韜』『三略』と『七書』について

第58回貴重書等指定委員会報告

新たな貴重書のご紹介



747/748号　2023年7/8月

国立国会図書館月報

NO. 747/748
JULY/AUGUST 2023

CONTENTS

1 『女房三十六歌仙』
—高まる江戸の教育熱—
今月の一冊　国立国会図書館の蔵書から

5 小特集　古活字版

6 嵯峨本とは何か　小秋元段

16 伏見版『六韜』『三略』と『七書』について
—慶長9年版『六韜』『三略』と慶長11年版『七書』の「六韜」「三略」が同版であること—

24 第58回貴重書等指定委員会報告
新たな貴重書のご紹介

28 館内スコープ
資料の入口はこちらです

29 本屋にない本
『岡山の野鳥たち　～むかし・いま・みらい～』

30 NDL Topics

表紙：
『[謡本]　関寺小町』
[慶長年間]　1冊　23.8×18.0 cm
古活字版　嵯峨本
https://dl.ndl.go.jp/pid/1288111/1/14

今月の一冊　国立国会図書館の蔵書から

『女房三十六歌仙』　―高まる江戸の教育熱―

櫛来亜矢子

右頁右下端に書の作者の住所、氏名、年齢が記載されています（「小網町二丁目豊田美祢女　六歳書」）。6才が書いたとは思えない見事な書です。なお、本書には同住所、同姓の10歳の少女の書も掲載されており、おそらく姉妹であったと考えられます。親にとってはさぞかし自慢の娘たちだったことでしょう。

女房三十六歌仙
細井鳥文斎 筆　永寿堂西村屋与八
寛政13（1801）年　1帖
https://dl.ndl.go.jp/pid/2533732

『女房三十六歌仙』は江戸時代後期に刊行された絵本で、日本橋長谷川町の手習い塾で書を学ぶ6歳から15歳の少女36名が書いた和歌に挿絵をつけたものです。少女たちの書には、それぞれ住所、氏名、年齢が記載されており、現代でいえば子ども書道教室の優秀生徒作品集といったところでしょうか。しかし、本書は、現代の私たちが想像する生徒作品集のレベルを遥かに超えた書物です。

頁を開くと、まず目に飛び込むのは少女たちの流麗な文字です。一見すると肉筆のようにみえますが、全て版木を彫って摺られた印刷物です。少女たちの達筆ぶりもさることながら、それを見事に表現した職人たちの技術の高さに驚かされます。そして、全ての書には当時の人気浮世絵師である鳥文斎栄之（ちょうぶんさいえいし）（宝暦6（1756）～文政12（1829）年）が描いた王朝歌人の華麗な錦絵が添えられています。これだけでも、一介の町の書道教室の作品集としては破格の豪華さですが、本書はさらに巻頭に、歌人・書家として名高い加藤千蔭（享保20（1735）～文化5（1808）年）の序文と、葛飾北斎（宝暦10（1760）～嘉永2（1849）年）の口絵まで掲げています。

江戸時代には本書のような三十六歌仙や百人一首等を題材とした歌仙絵本が多数出版されましたが、これほど贅を尽くした本は他に

（右）表紙。
（下）本書を刊行した永寿堂西村屋の店頭。西村屋は、少女たちが通った手習い塾が所在する日本橋長谷川町からほど近い馬喰町に店を構えていました。少女たちの住所も、徒歩で通塾が可能な日本橋界隈に集中しています。
『彩色美津朝』　鳥居清長［画］　永寿堂　1帖
https://dl.ndl.go.jp/pid/1288347/1/9

類をみません。採算性の面から、少女の親たちから資金提供を受けて出版した入銀物(にゅうぎん)[1]であったと考えられています。

本書の版元である西村屋与八は、本書の他に7歳と9歳の天才書家を描いた鳥居清長（宝暦2（1752）～文化12（1815）年）の大判錦絵[2]も刊行しており、才能ある少年少女を題材とした刊行物に一定の需要があったことが窺えます。では、いったいなぜ当時の人々は、このような刊行物に関心をもっていたのでしょうか。

理由の一つとして考えられるのが、当時の教育熱の高さです。江戸の町には多くの寺子屋が立ち並び、子どもたちは熱心に読み書きを学んでいました。中でも女の子は、読み書きの他に踊りや三味線など複数の稽古事にも通っていました。江戸庶民の暮らしを生き生きと描いた式亭三馬（しきていさんば）（安永5（1776）～文政5（1822）年）の洒落本『浮世風呂（うきよぶろ）』は、江戸の少女たちの慌ただしい日常をこのように伝えています。

朝むつくり起ると手習のお師さんへ行てお座を出して来て、夫から三味線のお師さんの所へ朝稽古にまゐつてね。内へ帰つて朝飯をたべて踊の稽古からお手習へ廻つて、お八ツに下ツてから湯へ行て参

下段中央に「ふり出し　弟子入」とあり、上段中央に「上り　御奉公」とあります。途中には「ぬひもの（縫物）」「おどり（踊り）」「三味せん（三味線）」「ちやのゆ（茶の湯）」「ごしやうぎ（御将棋）」等様々な芸事が列挙されています。奉公にあがるには多くの芸事を身につける必要があったことが分かります。
『新板娘諸藝雙六』山田屋三四郎
1枚
https://dl.ndl.go.jp/pid/1310670

ると、直にお琴の御師匠さんへ行て、夫から帰つて三味線や踊のおさらひさ。其内に、ちイツとばかりあすんでね。日が暮ると又琴のおさらひさ[3]

朝起きてから夜寝るまで、いくつもの稽古事に追われ息つく暇もありません。

少女たちがここまで頑張るのには、理由がありました。天保8（1837）年から約30年かけて書き続けられた随筆『守貞謾稿（もりさだまんこう）』は、女子が三味線や琴を習うのは約100年前頃からの風潮であるとし、特に江戸についてはこのように記しています。

江戸は特に小民の子といへども必ず一芸を熟せしめ、それをもつて武家に仕へしめ、武家に仕へざれば良縁を結ぶに難く、一芸を学ばざれば武家に仕ゆること難し[4]

良い縁談を得るには、武家奉公が前提であり、その為には何か一芸に秀でる必要があったのです。

習い事の出来不出来が人生を左右するとあれば、本人たちは勿論のこと、その親たちも当然力が入ります。本書のような才能ある子どもたちを題材にした刊行物が出版された背景には、自身の未来のために日々稽古事に励

手習いの様子を
のぞいてみると

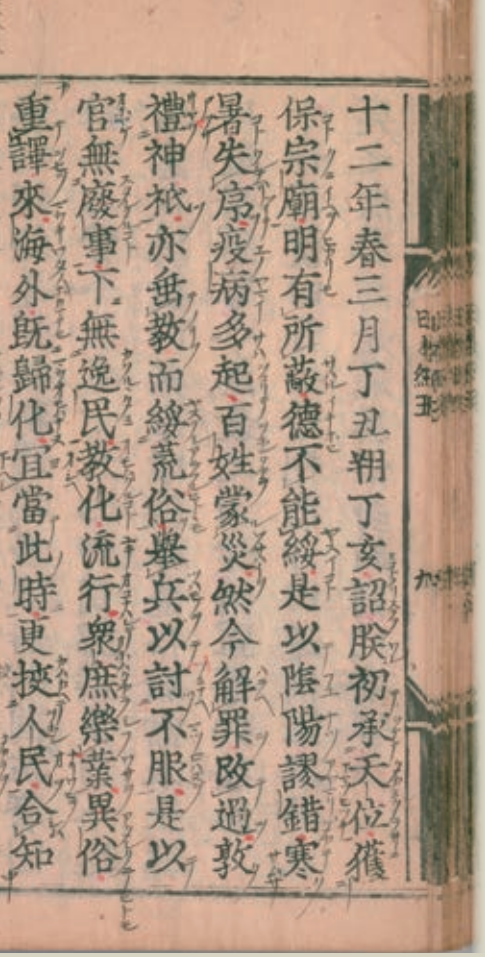
（右）手習いをしている子どもに、母親らしき人物がなにやら声をかけています。背景には「一日一字習者　三百六十字　一字千金当」「手習は坂に車をおすことく　ゆだんをすれは跡へもとるそ」と書かれています。当時の教育熱の高さが窺えます。
『春乃遊手習出世双六』［双六袋］　芳虎　画　丸屋鉄次郎　1枚
https://dl.ndl.go.jp/pid/1301602/1/1
（下）手習い塾の様子が描かれています。本書の少女たちも、このように日々学んでいたのでしょうか。
『絵本栄家種』［勝川春潮 画］　和泉屋市［兵衛］　寛政2（1790）年　2冊
https://dl.ndl.go.jp/pid/1286828/1/5

む子どもたちと、そんな我が子を支える親たちの存在があったのかもしれません。

本書に見事な書を残した36人の少女たちがその後、どのような人生を辿ったのかは残念ながら分かっていません。どんな道に進んだとしても、それぞれの場所で、幸せな人生を送ってくれたことを願わずにはいられません。

1 作者や注文者が経費をあらかじめ負担した出版物。
2「玉花子の席書」「源成之の席書」天明3（1783）年　西村屋与八刊。
3『日本古典文学大系』第63（浮世風呂）岩波書店, 1957, p.185<918-N6852>。
4 喜田川守貞 著, 宇佐美英機校訂『近世風俗志：守貞謾稿』第3巻, 岩波書店, 1999, p.436<GB341-G11>。

○参考文献
鈴木淳 著『橘千蔭の研究』ぺりかん社, 2006<KG244-H46>
国文学研究資料館, チェスター・ビーティー・ライブラリィ 共編『チェスター・ビーティー・ライブラリィ絵巻絵本解題目録 解題篇』勉誠出版, 2002<K3-G204>
『浮世絵に描かれた子どもたち』千葉市美術館, [2014]<KC16-L1008>
市川寛明, 石山秀和 著『図説江戸の学び』河出書房新社, 2006<FB13-H29>
※引用の旧字は新字にしました。
※＜　＞内は当館請求記号



小特集

古活字版

「古活字版」とは、16世紀末から17世紀前半のおよそ50年間に出版された活字による印刷本のことをいいます。中世以前の寺院中心の出版界を一変させ、多様な出版文化が花開くきっかけを作ったとも言われ、その内容は、仏書、漢籍、国書の文学書、歴史書や医書などの実用書にも及びました。

当館は、最古の刊記がある『天台四教儀集解（てんだいしきょうぎしゅうげ）』をはじめ、古活字版およそ300点を所蔵する、国内有数の所蔵館です。

今回の小特集では、古活字版の中でも最も美しく、日本の書物文化の粋とも言われる「嵯峨本」について、小秋元段先生（法政大学）から寄稿をいただきました。また、徳川家康の命により出版された古活字版の「伏見版」について、資料を「見る」ことで明らかになった事実をご紹介します。

古活字版の世界に足を踏み入れてみませんか。

嵯峨本とは何か

小秋元　段

法政大学文学部教授
専攻は日本文学。主著に『太平記・梅松論の研究』（汲古書院、2005年）、『増補太平記と古活字版の時代』（新典社、2018年）

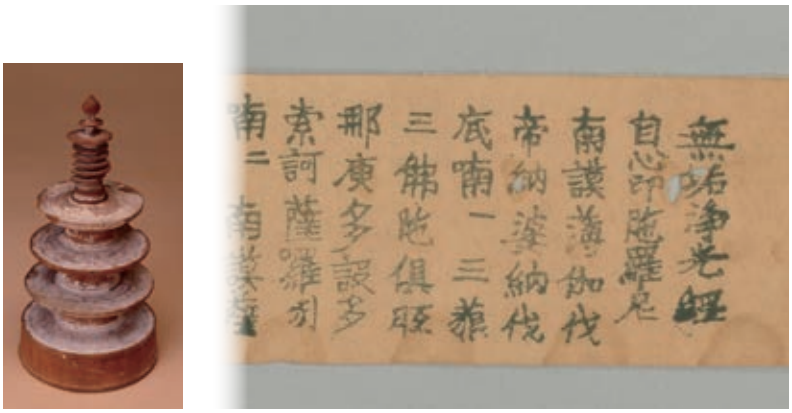


図1　『百万塔陀羅尼』（無垢浄光経自心印陀羅尼）　神護景雲４（770）年刊
国立国会図書館所蔵< WA3-1 >
https://dl.ndl.go.jp/pid/2584849/1/2

古代・中世の印刷・出版

日本の印刷・出版の歴史を語るうえで、最古の遺品とされるのが「百万塔陀羅尼」である[図1]。これは神護景雲４（７７０）年、称徳天皇が藤原仲麻呂の乱の戦没者を供養するため、百万基の木製の小塔を造立し、『無垢浄光大陀羅尼経』を印刷してそのなかに納めさせたものである。韓国慶州の仏国寺の釈迦塔からも同様の陀羅尼が発見されており、日本の印刷の歴史は東アジア史的視点で位置づけることが必要だ。

その後、しばらくの空白期を経て、印刷の営為が再び記録上に現れるのは藤原道長の全盛期、11世紀初頭のことである。貴族たちが経典の摺刷を供養として行った事例が日記類に散見される。その背景には五代から北宋にかけて、中国で出版事業が隆盛を迎えていたことがあげられる。寛和２（９８６）年、東大寺の奝然は、宋の太宗より賜った蜀版の『大蔵経』を日本へもたらした。こうした文物の到来が、経典の印刷を促すことになったのである。

その後、中世における印刷・出版は大寺院で行われ、その対象も経典やその注釈書類となることが専らであった。寺院にはそれを必要とする多くの学僧がいた。また、刊行に要する費用は布施として集めることも可能であった。中世における代表的な出版の拠点といえば、興福寺（春日版）[図2]、金剛峯寺（高野版）、知恩院などがあげられる（カッコ内はその版本の呼称）。

図2　春日版『成唯識論』巻一　［鎌倉・南北朝頃］刊
国立国会図書館所蔵< WA3-11 >
https://dl.ndl.go.jp/pid/1286896/1/4

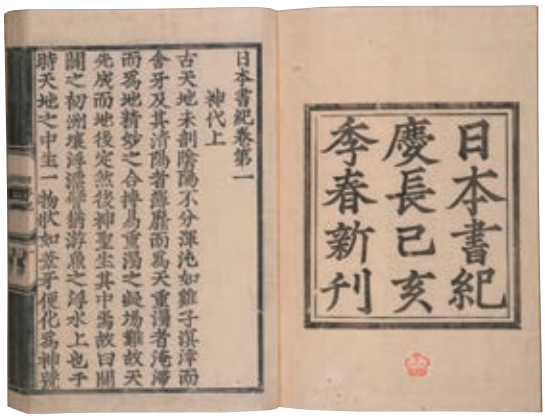


図3　慶長勅版『日本書紀』巻一・神代上　慶長４（1599）年刊
国立国会図書館所蔵< WA7-251 >
https://dl.ndl.go.jp/pid/1286872/1/3

やがて南北朝・室町期になると、禅宗の存在感が大きくなる。ここでも出版は盛んで、禅籍の刊行は勿論のこと、詩文を愛好した禅僧に向けて詩集や辞書なども開版された。これらを禅宗の統括にあたった京都・鎌倉の五山にちなんで五山版と呼ぶ。五山版のなかには、宋元版の被せ彫り（覆刻）も少なくなかった。禅僧らは得意の外交を通じて、最新の中国の学術を導入し、共有したのである。

古活字版の登場

古代・中世の印刷は整版によっていた。整版とは、文字や図を彫刻した版木に墨を塗り、上から紙をあてて馬棟で刷る技法である。版木を製作するには多大な経費が必要であったが、一度版木を製作し、それを所有していれば、増刷の需要に応えることができた。その利点から、日本の印刷は古代・中世のみならず、近世においても整版が主流であった。

こうしたなか、日本で活字印刷が導入されるのは安土桃山時代のことであった。豊臣秀吉による文禄・慶長の役では、朝鮮半島で多くの略奪が行われたが、そのなかに銅活字も含まれていたのである。当時の朝鮮は世界でも最高水準の活字出版文化を誇る国であった。

秀吉は朝鮮銅活字を後陽成天皇に献上した。天皇は文禄２（1593）年に『古文孝経』を、慶長２（1597）年に『錦繡段』『勧学文』を開版させ、以後も刊行事業をつづけた（文禄勅版・慶長勅版）［図3］。文禄勅版は現存していないため、朝鮮銅活字が用いられたのかは不明だが、慶長勅版では日本で彫造された木活字が使用された。以後、概ね寛永年間（1624～1644）にかけて活字印刷された本を「古活字版」と呼ぶ。活字版の利点は、整版に比べると簡便に印刷の事業が行えるところにあった。そのため、仏典に限らず、漢籍、医書、文学・芸能の書など、あらゆるジャンルの書籍が印刷され、近世出版文化の魁となった。

この時期、徳川家康も活字による出版事業に力を入れ、伏見の円光寺の閑室元佶に『孔子家語』『六韜』『三略』ほかを刊行させている（伏見版）。同時に、民間における出版活動も勃興した。その代表的存在が京都嵯峨で活動した角倉

図4　嵯峨本『伊勢物語』上
慶長13（1608）年刊
国立国会図書館所蔵< WA7-238 >
https://dl.ndl.go.jp/pid/1287963/1/4

素庵（1571～1632）だ。素庵は豪商角倉了以の子で、父の事業を継承するほか、儒学や詩文、日本の古典を深く学び、能書としても知られた。素庵の主導で刊行された書物を「嵯峨本」という。雲母刷模様の施された表紙や料紙を用い、流麗かつ個性的な平仮名活字で印刷された嵯峨本は、書物文化の精華といえる。2000年代に入って素庵の筆跡研究が急速に進み、嵯峨本の活字は素庵の書体をもとにすることもわかってきた[1]。

嵯峨本の該当書と刊行時期

嵯峨本の研究に多大な足跡を残したのは、書誌学者の川瀬一馬（1906～1999）である。その主著『古活字版之研究』では、以下の書籍が嵯峨本と認定されている。

伊勢物語（十種）、伊勢物語聞書（肖聞抄）（二種）、源氏小鏡（一種）、方丈記（二種）、撰集抄（一種）、徒然草（五種）、観世流謡本（九種）、久世舞三十曲本（一種）、久世舞三十六曲本（一種）、新*古今和歌集月詠歌巻（一種）、百人一首（二種）、三*十六歌仙（二種）、二*十四孝（一種）

＊を付したものは整版

川瀬による嵯峨本の定義とは、「光悦が自ら版下を書き、其の装潢に美術的の意匠を施したもの」、ならびに「光悦の書風・装潢等の影響を頗る豊富に具備する刻書」というものであった[2]。つまり、書風や装訂が（本阿弥）光悦の手によるものと、光悦の影響を強く受けたものとを嵯峨本としたのである（嵯峨本の書風が素庵のものをもとにすることは、前述のとおりである）。

嵯峨本の刊行時期については不明な点が多い。刊記・識語に年紀が刻されたものとしては、『伊勢物語』の慶長13・14・15年（1608・1609・1610）［図4］、『伊勢物語肖聞抄』の慶長14年、『源氏小鏡』の慶長15年をあげるにとどまる。このほか、『方丈記』の一本に慶長15年7月の墨書の識語があり、「観世流謡本」の刊行は慶長10年頃まで溯れると推測されている[3]。これらにもとづけば、嵯峨本は慶長年間（1596～1615）の後

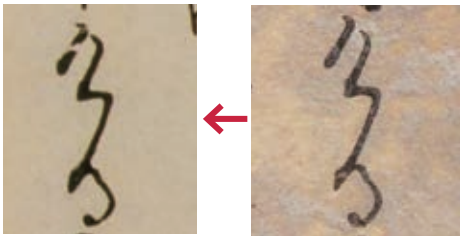


図6
（右）　嵯峨本第一種本『徒然草』上　［慶長8（1603）年］以前刊　国立公文書館内閣文庫所蔵（請求記号　特27-18）

（左）　下村本『平家物語』巻一　［慶長9（1604）年］頃刊　国立国会図書館所蔵 < WA7-255 > https://dl.ndl.go.jp/pid/1288262/1/11

『平家物語』では「ける」の活字に欠損が生じている。欠損の有無で、刊行の先後がわかる。

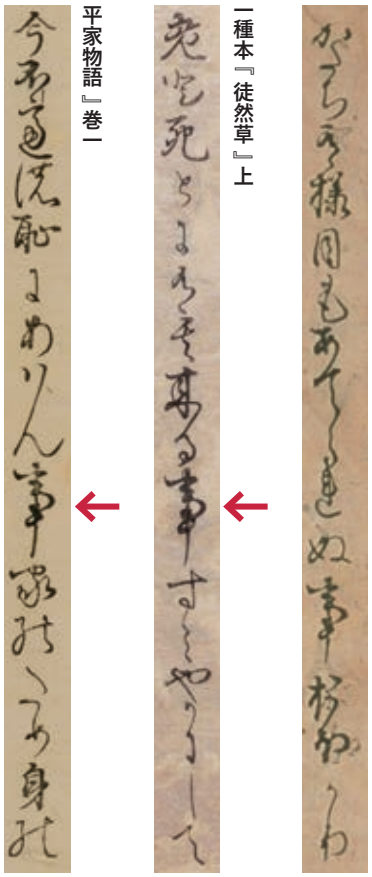


図5　右から
十行本『方丈記』［慶長8（1603）年］以前刊
京都大学附属図書館所蔵（請求記号　10-05/ホ/1貴）

嵯峨本第一種本『徒然草』上　［慶長8（1603）年］以前刊
国立公文書館内閣文庫所蔵（請求記号　特27-18）

下村本『平家物語』巻一　［慶長9（1604）年］頃刊
国立国会図書館所蔵< WA7-255 >
https://dl.ndl.go.jp/pid/1288262/1/7

三書の「事」の活字が共有されている。

半に刊行されたと考えられる。

嵯峨本の広がり

川瀬一馬は嵯峨本を書風と装訂という、二つの特色から定義した。だが、この二点に縛られると、嵯峨本の実態や素庵の出版事業をとらえきることはできない。慶長期に刊行されたとみられる書籍のなかには、雲母刷模様の表紙や料紙は用いられないものの、嵯峨本と同じ活字を用いるものが存在するためだ。これらも嵯峨本と一群をなす書籍ととらえなくてはなるまい。

これに該当するのが十行古活字本『方丈記』と下村本『平家物語』である。これらは従来、嵯峨本とは認定されてこなかったが、嵯峨本『徒然草』と同じ活字を使用している。試みに、三者の「事」という活字を並べてみる。これらが同一の活字であることは明らかだろう［図5］。このほか、一つ一つ事例をあげる遑（いとま）はないが、活字の交代（これまで使われていた活字が使われなくなり、代わって新たな活字が使われること）や、同一活字の欠損（使用する過程で、活字に傷

が生じること）を追ってゆくと、この三者は『方丈記』→『徒然草』→『平家物語』の順で刊行されたことがわかる［図6（前頁）］。

嵯峨本の前史

これらの刊行時期はいつなのか。その手がかりは、素庵が刊行したことが確実な古活字版『史記』（漢籍ではあるが、嵯峨本『史記』と通称される）が与えてくれる。当時、書物の表紙は料紙を二枚、三枚と貼りあわせることにより製作された。その料紙には白紙だけでなく、書状や大福帳の反古（ほご）、版本の刷（すり）反古（印刷に失敗したものや試し刷り）なども用いられた。近世初期の書籍を観察していると、表紙の裏張（うらばり）にこうした反古を見いだすことがしばしばある。

現存する嵯峨本『史記』には、原装表紙の裏張に刷反古をもつものがある。そのなかで、国立公文書館内閣文庫に所蔵される一本に、古活字版の謡本や嵯峨本『徒然草』の刷反古が用いられている。『史記』の刊行は、山科言経（ときつね）の日記『言経卿記』の記述から、慶長8（1603）年以前であることが判明している。よって、嵯峨本『徒然草』の刊行時期もそれ以前であったことがわかる。また、下村本『平家物語』の刊行も慶長9年前後と推測されている[4]。したがって、『方丈記』『徒然草』『平家物語』の三書は、「観世流謡本」や『伊勢物語』など、嵯峨本の代表的書籍に先立って刊行された、嵯峨本の前史を形成する書籍群であるといってよい。

ちなみに、下村本『平家物語』には巻末に「下村時房刊之」の刊語が刻されている。下村時房（ときふさ）の伝は未詳だが、素庵のもとで『平家物語』刊行の実務にあたった者と思われる。嵯峨本の工房では、素庵の指導・庇護などを受けて、刊行の実務にあたる者が複数存在したのであろう。

特殊なレイアウト

十行本『方丈記』、嵯峨本『徒然草』、下村本『平家物語』のレイアウトには興味深い共通点が存在する。これらは、各行に文字を割り付けてゆくにあたり、行末が必ず文節の切れ目になるよう配字され、文節が行を跨ぐことが決してないのである［図7］。活字版の場合、活字一コマの大きさには一字が割り当てられるのが普通である（平仮名活字には連綿体のものもあるので、実際には二コマ分以上の長さをもつ活字も多い）。したがって、各行末に文節の切れ目が来るように割り付けを行うには、相当の配慮が必要であった。この三書は、漢字と仮名の使い分けや、例えば、二コマ分に三字、三コマ分に四字を圧縮して刻した活字などを取り入れ、各行の字数調整を行っているのである。

こうした割り付けに対する入念な配慮は、嵯峨本の「観世流謡本」と『方丈記』に引き継がれた。しかし、古活字版全体を見ても、他にこの意識を徹底する本は存在しない。

行末を文節の切れ目で揃えるこの配字法は、キリシタン版国字本（こくじ）に見られるものである[5]。キリシタン版とは、天正18（1590）年にイエズス会巡察使ヴァリニャーノによって日本へもたらされた西欧式の印刷技法を用いて刊行された書物のことである。印刷器具一式は肥前国加津佐、天草、長崎と移転し、そのなか

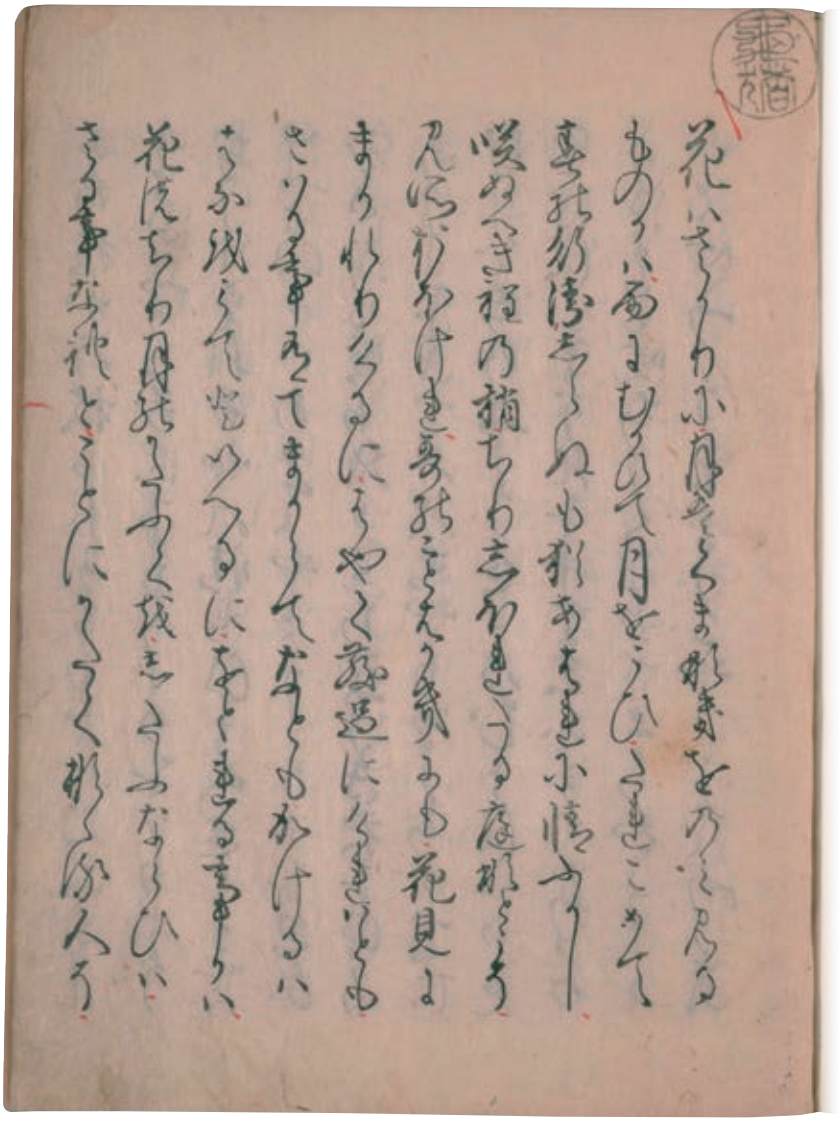


図7　嵯峨本『徒然草』下　［慶長年間］刊
国立国会図書館所蔵< WA7-219 >
各行、文節の切れ目で行末を迎えている。
https://dl.ndl.go.jp/pid/2544702/1/2

でローマ字本と国字本が刊行された。キリシタン版では活字と活字の間に込め物を施し、単語の間を空けて可読性を高める工夫が一般的に行われていた。込め物の込め方次第で、行末を文節の切れ目で揃えることは容易だったのである。

十行本『方丈記』以下、一部の嵯峨の刊行書に見られるレイアウト意識は、キリシタン版を範とするものであろう。角倉家は南蛮貿易で財を築いた。キリシタン文化に対する素庵の感度の片鱗が、ここには微かに感じられる。だが、それは他の古活字版には受け継がれなかった。割り付けが煩雑であること、文節が行を跨いでも日本語を母語とする者には大きな支障とならなかったことが理由と思われる。

嵯峨本の三系統

嵯峨本の古活字版の書風はいずれも素庵のものをもとにしながら、それぞれ微妙な違いも見せている。その違いにもとづくと、嵯峨本は三系統に分けられる。

第一は『伊勢物語』のグループである。刊語に慶長13・14・15年の年紀をもつ複

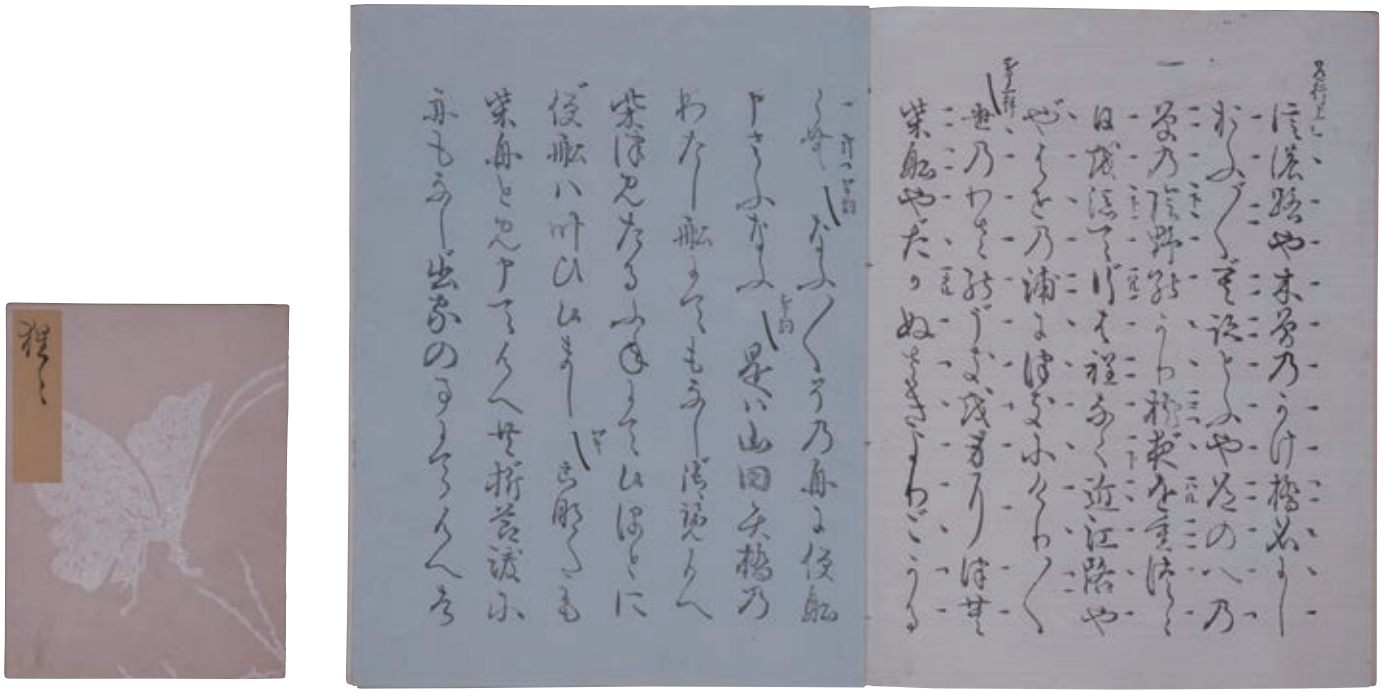


図8　嵯峨本観世流謡本・色替り本『猩々』表紙、『兼平』本文　［慶長年間］刊　国立国会図書館所蔵< WA7-256 >
表紙に雲母刷文様を施し、本文料紙も色替りである。
https://dl.ndl.go.jp/pid/1288107/1/1
https://dl.ndl.go.jp/pid/1288093/1/3

数の版と『撰集抄』がこのグループに属する。このうち、慶長13年刊初刊本と再刊本は同じ活字を使用している[6]。第二は「観世流謡本」のグループである［図8］。『百人一首』と『方丈記』（嵯峨本）もこのグループに入る。「観世流謡本」には複数の版種があって、このうちの特製本と『百人一首』の活字が同じものであるという[7]。第三は『徒然草』のグループである。ここには『伊勢物語肖聞抄』と『源氏小鏡』が入るほか、さきに見た十行本『方丈記』と下村本『平家物語』も入る。第三のグループに属するすべての書籍は、同じ活字を共有している。

実は、嵯峨本『徒然草』には六種類もの異植字版（同じ活字を使用した別版）が存在する。『古活字版之研究』増補版にいう第一種本～第六種本（第二種は欠番。第五種は現在存否不明）と、それ以後に存在が知られた国立国会図書館蔵本である。活字の交代や同一活字の欠損・摩滅などを頼りに、これら五種と他の書籍の刊行順をたどると、つぎのようになる。

十行本『方丈記』
嵯峨本第一種本『徒然草』

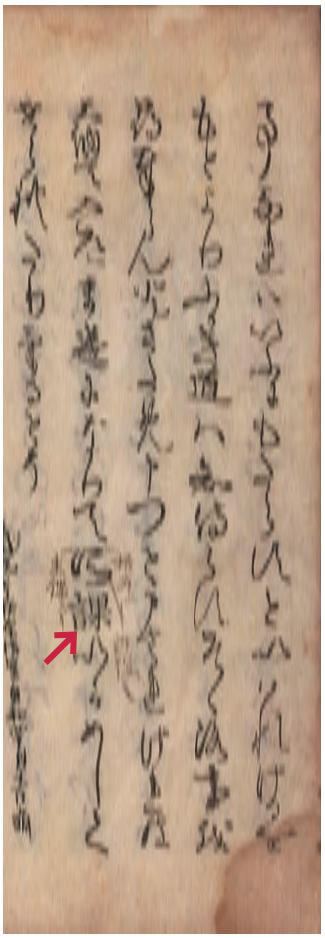


図9　嵯峨本第三種本『徒然草』上　［慶長年間］刊　公益財団法人東洋文庫所蔵（請求記号三Ba 18）
「課」の活字は『日本書紀』所用のものを流用している。［図10］参照。

図10　古活字版『日本書紀』巻五　第9丁裏　慶長15（1610）年刊　国立国会図書館所蔵
＜WA7-120＞
https://dl.ndl.go.jp/pid/2544342/1/43

嵯峨本国会本『徒然草』
下村本『平家物語』
嵯峨本第四種本『徒然草』
嵯峨本第三種本『徒然草』
嵯峨本『伊勢物語肖聞抄』
嵯峨本『源氏小鏡』
嵯峨本第六種本『徒然草』

六種もの『徒然草』あり、全十二巻の『平家物語』ありと、これらの書籍の活字群は息長く用いられた。この第三のグループこそ、嵯峨本の脊梁（せきりょう）をなす存在なのである。

嵯峨本の工房と『日本書紀』

このうち、興味深い事例を紹介しよう。嵯峨本第三種本『徒然草』の上冊、第百三十五段の「大納言入道まけになりて、所課いかめしくせられたりけるとそ」という一節の「課」の字に注目したい［図9］。平仮名古活字版の漢字書体は行書または草書であるのが普通だが、この「課」の字は明らかに楷書である。ちなみに第三種本以外では行書体の「課」の活字が用いられている。第三種本では何らかの理由で、嵯峨本活字セット中の行書の「課」

が使用できず、他書の活字を流用したものと思われる。

その流用元は慶長15年刊の『日本書紀』であった［図10（前頁）］。慶長15年版『日本書紀』は三十巻十五冊で、刊語の末尾には「慶長十五庚戌仲夏念八／洛汭野子三白誌」と刻されている。「野子三白」と称する人物は未詳である。

だが、夙に本書を研究した近藤喜博（1911〜1997）は、その刊行者について注目すべき伝承のあることを紹介している。[8] 慶長15年版『日本書紀』のうち、大東急記念文庫に所蔵される一本に、松尾大社の摂社、月読神社の禰宜家である秦氏（松室家）の旧蔵本がある。本書には墨書・朱書による数次の附訓加注がなされており、万治2（1659）年より寛文3（1663）年にかけての秦重種による加点の際には、角倉素庵加点の写本をもとにしたと記している。さらに、重種の子、種盛が正徳元（1711）年までに加注した際には、複数の冊の上層に、この慶長15年版が角倉素庵による「植字本」（古活字版のこと）であると書き入れている。また、同じ書き入れには、角倉家と松室家とが素庵以来、相婿の姻戚関係にあったとも記されていて、この本の刊行者を素庵だとする伝承の正しさが窺える。

嵯峨本第三種本『徒然草』の活字に慶長15年版『日本書紀』の活字が流用されていたことは、嵯峨本の工房と『日本書紀』の工房が地続きで、しかも素庵によって統括された空間であったことを物語っていよう。

再び、嵯峨本の広がり

川瀬一馬は嵯峨本を活字と装訂という二つの点から定義した。その定義によると、十行本『方丈記』と下村本『平家物語』が漏れることになる。形態上の分類としてはやむを得ないところもあるが、嵯峨本の実像をとらえるためには別の尺度も必要となる。

同時に、角倉素庵の出版活動全体をとらえるときには、さらに広い視野が求められる。嵯峨本『史記』の存在がそれを象徴しているが、慶長15年野子三白刊の『日本書紀』が素庵の刊行書であることも揺るぎないものとなった。他にも、国立国会図書館蔵の嵯峨本『伊勢物語肖聞抄』表紙裏張に刷反古が現れる、慶長10年刊『元亨釈書』も気になる存在である［図11］。同書は下村時房と同姓の下村生蔵によって刊行されている。下村生蔵には慶長8年刊『医学正伝』、同9年刊『教誡新学比丘行護律儀』の刊行の実績もある。他にも気になる古活字版はあり、これらを原典に即して精査してゆくことが、嵯峨本世界を成り立たせた素庵の工房の実像を明らかにすることにつながるのだ。

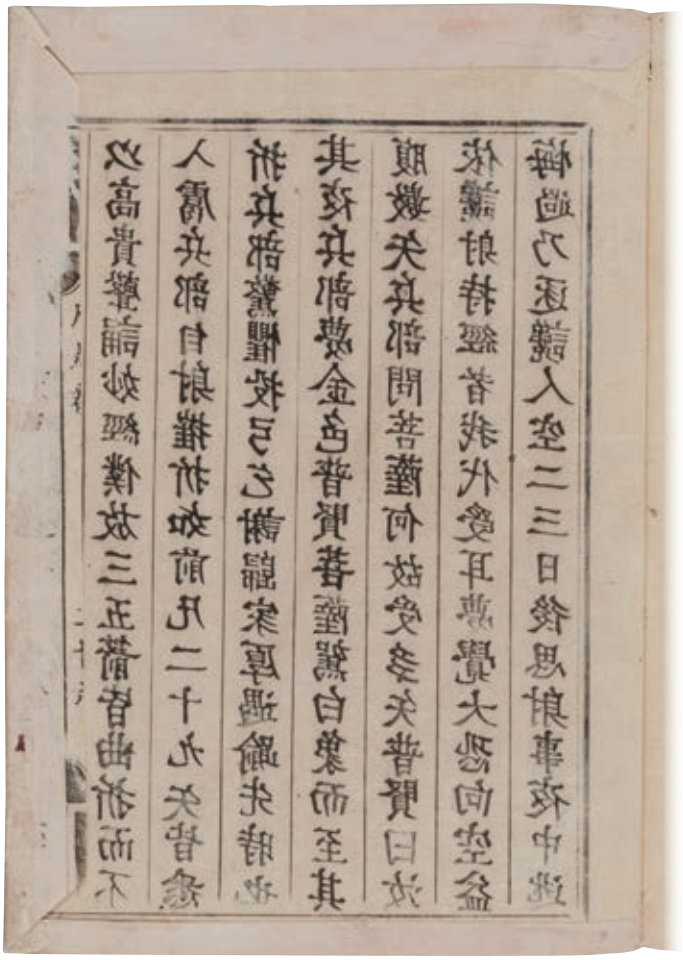


図11　嵯峨本『伊勢物語肖聞抄』中後表紙裏張　慶長 14（1609）年刊
国立国会図書館所蔵< WA7-29 >
慶長 10 年刊『元亨釈書』の刷反古が用いられている。
https://dl.ndl.go.jp/pid/2555021

○注

1　林進「角倉素庵の書と嵯峨本」（『水茎』29, 2001）ほか。< Z71-E728 >

2　川瀬一馬『古活字版之研究』増補版 上巻　第二編第七章第二節「「嵯峨本」の刊行」（日本古書籍商協会，1967。初版 , 安田文庫 , 1937）https://dl.ndl.go.jp/pid/2974633

3　江島伊兵衛・表章『図説光悦謡本 解説』第一章一「光悦謡本とは」（有秀堂 , 1970）< W991-6 >

4　高木浩明『中近世移行期の文化と古活字版』第一部第一章「下村本『平家物語』と製作環境をめぐって」（勉誠出版 , 2020。初出 ,『人文論叢』58, 1997）< UM24-M6 >

5　鈴木広光『日本語活字印刷史』第2章「古活字版の仮名書体」（名古屋大学出版会 , 2015）< UE82-L18 >

6　鈴木広光注5前掲書第1章「嵯峨本『伊勢物語』の活字と組版」（初出,『汲古』59, 2011）

7　森上修「館蔵〈光悦謡本〉「矢卓鴨」について」（『香散見草』31, 2003）< Z21-1467 >

8　近藤喜博「角倉素庵と日本書紀」（『國學院雑誌』56(1), 1955.6）
https://dl.ndl.go.jp/pid/3365254/1/9

○参考文献

小秋元段『増補太平記と古活字版の時代』（新典社 , 2018）< KG161-L20 >

小秋元段「嵯峨本とその前史の一相貌」（『法政大学文学部紀要』82, 2021）< Z22-102 >

小秋元段「活字から見た嵯峨本―『徒然草』とその前後―」（『古典文学研究の方法と対象』仮題 , 花鳥社 , 2023 年刊行予定）

※　<　　>内は当館請求記号

伏見版『六韜』『三略』と『七書』について

―慶長9年版『六韜』『三略』と慶長11年版『七書』の「六韜」「三略」が同版であること―

上田　由紀美

古活字版について興味深い研究が行われていることはわかったけれど、調べるのって難しいんでしょう？　って思われていませんか。いいえ、そんなことはありません。もちろん地道で緻密な調査を積み重ねなければわからない事柄も多々あります。けれども、ただ「見る」だけで思いがけない事実に気づくこともあるのです。ここでは、私が資料を「見る」ことで気が付いた、伏見版『六韜』[1]『三略』[2]と『七書』[3]についての思いがけないことをご紹介します。

伏見版とは

伏見版とは徳川家康（1543～1616）の命により出版された古活字版です。家康は足利学校の庠主（校長）であった閑室元佶（1548～1612）を京都の伏見に呼び寄せ、木活字10万個を与えて出版事業を始めさせます。関ヶ原合戦の前年にあたる慶長4（1599）年から慶長11年にかけて、『孔子家語』『六韜』『三略』『貞観政要』『周易』『七書』が出版されました。[4] これらは為政者の教科書として重んじられた書物であり、早くより武だけではなく文をも重視していた家康の姿勢が窺われます。

さて、この中でも繰り返し版を重ねたのが、中国古代の兵法書で、政治論の書としても読まれていた『六韜』『三略』と、この2書を含む兵法書7書をあわせた『七書』でした。

伏見版『六韜』『三略』と『七書』

伏見版『六韜』には慶長4年、5年、9年に出版された伝本があり、このうち慶長9年のものには2種類の版があることが知られています。

一方、『三略』には慶長5年、9年の伝本が残されています。また、伝本はありませんが、江戸幕府の書物奉行であった近藤重蔵（1771～1829）の記録[5]から慶長4年にも出版されていたことがわかりま

図2　慶長 11 年（二）版『七書』のうち「三略」国立公文書館所蔵（請求記号　299-0203）

図1　慶長 5 年版『三略』九州大学中央図書館（支子文庫）所蔵（請求記号　399-コ-1/1/3）

1 文字目の「黄」を見比べると、図 1 の「黄」の 4 画目の横棒は図 2 に比べて左に突き出しており、図 1、2 には異なる活字が使用されていることがわかります。このように、活字セットの中には一つの文字につき複数の活字が用意されているため、版によって使用される活字が変わり版面は異なります。

伏見版『六韜』『三略』『七書』の出版

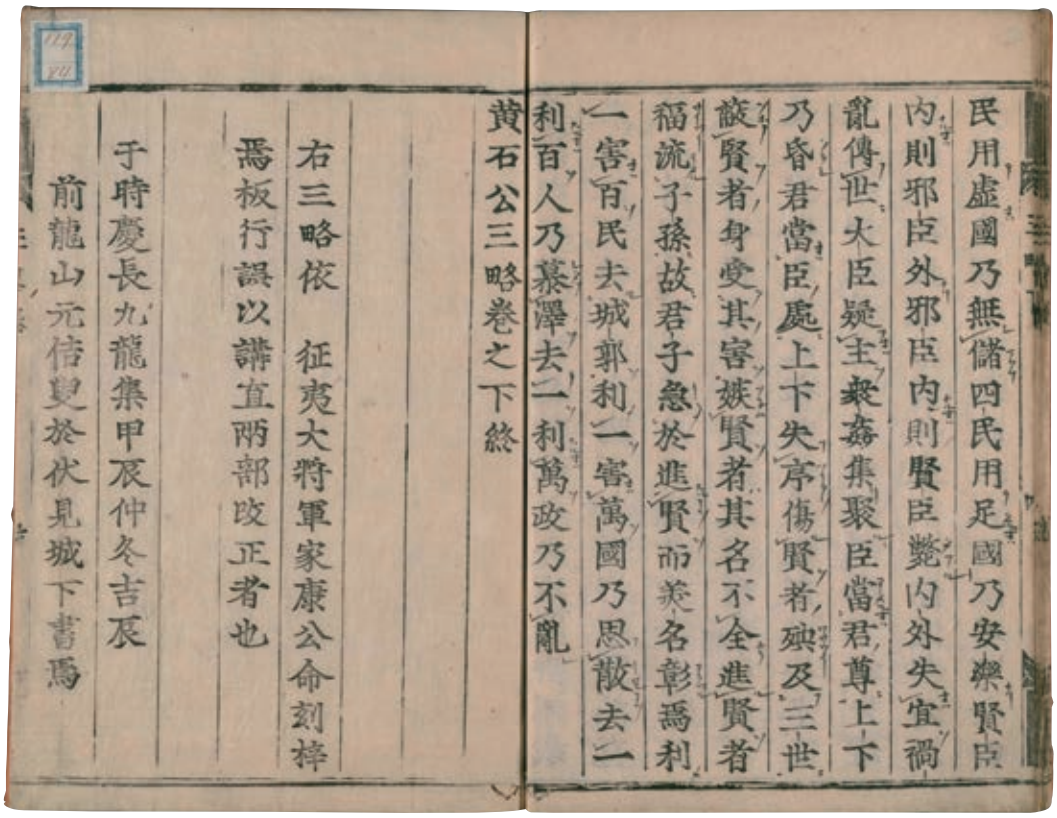
刊語・跋の年記	書名	
慶長 4 年仲夏	六韜	三略（記録より）
慶長 5 年初夏（孟夏）	六韜	三略
慶長 9 年仲冬	六韜（2 種類あり※）	三略
慶長 11 年初秋	七書（六韜・三略を含む）（2 種類あり※）	

※本稿では慶長 9 年版『六韜』、慶長 11 年版『七書』の版種を以下のように記します。
『六韜』:「慶長 9 年（一）版」（東洋文庫所蔵本等）、「慶長 9 年（二）版」（天理図書館所蔵本等）
『七書』:「慶長 11 年（一）版」（東洋文庫所蔵本等）、「慶長 11 年（二）版」（国立公文書館内閣文庫所蔵本等）

す。『六韜』と『三略』はおそらく揃いで出版されていたのでしょう。慶長9年の『三略』は1種類しか伝わっていませんが、『六韜』と同様に慶長9年に2回出版されていた可能性が高いと思われます。

そして、慶長11年には「六韜」「三略」を含む『七書』が出版されます。慶長11年の『七書』にも2種類の版が知られていますので、『六韜』は伏見版として計6回、『三略』もおそらくは同じ回数出版されたと考えられます。

伏見版『六韜』『三略』の各版は、同じ本文[6]を、同じ活字セットを用いて、行数・字数・匡郭（四周の枠）なども同じ形式で印刷されています。したがって、とてもよく似ていますが、細かく見ていくと少しずつ違いがあることがわかります［図1、図2］。詳しくは後述しますが、古活字版は印刷が終わると組版をばらしますので、違う年に印刷されたものが異なるのは当然といえるのです。


民用虛國乃無儲四民用足國乃安樂賢臣
内則邪臣外邪臣内則賢臣斃内外失宜禍
亂傳世大臣疑主姦姦集聚臣當君尊上下
乃昏君當臣處上下失序傷賢者殃及三世
簒賢者身受其害嫉賢者其名不全進賢者
福流子孫故君子急於進賢而美名彰焉利
一害百民去城郭利一害萬國乃思散去一
利百人乃慕澤去一利萬政乃不亂
黄石公三略卷之下終

右三略依　征夷大將軍家康公命刻梓
焉板行誤以講宜所部改正者也

于時慶長九龍集甲辰仲冬吉辰
前龍山元佶叟於伏見城下書焉

図3　慶長9年版『三略』
国立国会図書館所蔵 <WA7-22>　https://dl.ndl.go.jp/pid/2532141/1/17

慶長9年版『三略』と慶長11年（一）版『七書』の「三略」

ところがです。東洋文庫所蔵の慶長11年（一）版『七書』の閲覧にうかがった時、持参していた当館所蔵の慶長9年版『三略』のコピーと見比べて、あれ？　と驚くことになったのです。慶長9年版『三略』と慶長11年（一）版『七書』の「三略」、右側のページを見比べてみてください［図3、図4］。そっくりではないでしょうか？　ここに挙げたのは巻末だけですが、全丁見比べても同じなのです。違いとしては、慶長9年版『三略』には末尾に刊語（刊行経緯を記した文章）の丁があり、その1行目に巻末書名が記されるのに対して、慶長11年（一）版『七書』の「三略」には刊語の丁がなく、本文の最終行の下に「三略終」の3字が加えられていることだけです。

これはいったい、どういうことでしょう？　その疑問の答えについては後述することとして、私にはもう一つ疑問が浮かんできました。先述のように『六韜』と『三略』は揃いで出版されています。では『六韜』もまた慶長9年のものと慶長11年（一）版『七書』のものとが同じなのではないか……

民用虛國乃無儲四民用足國乃安樂賢臣
內則邪臣外邪臣內則賢臣斃內外失宜禍
亂傳世大臣疑主衆姦集聚臣當君尊上下
乃昏君當臣處上下失序傷賢者殃及三世
蔽賢者身受其害嫉賢者其名不全進賢者
福流子孫故君子急於進賢而美名彰焉利
一害百民去城郭利一害萬國乃思散去一
利百人乃慕澤去一利萬政乃不亂 三略終

図4　慶長11年（一）版『七書』のうち「三略」
公益財団法人東洋文庫所蔵（請求記号　三-A-k-1）

慶長9年（二）版『六韜』と慶長11年（一）版『七書』の「六韜」

慶長9年版『六韜』には2種類ありますが、慶長9年（一）版を閲覧したところ慶長11年（一）版『七書』とは版面が異なりました。では、もう一方の慶長9年（二）版はどうでしょうか。複写物[7]を取り寄せてみたところ、予想は当たり、やはり慶長11年（一）版『七書』の「六韜」と全丁が同版であることがわかりました[8]［図5、図6（20、21頁）］。違いとしては、慶長9年（二）版『六韜』には刊語の丁が末尾にありますが、慶長11年（一）版『七書』の「六韜」にはそれがないだけです。

つまり、『六韜』も『三略』も、慶長9年のものと慶長11年（一）版『七書』に含まれるものとが同版なのです。

なぜ慶長9年と慶長11年の版が同版なのか

慶長9年と慶長11年のものが同版というのは、とても意外なことでした。なぜなら古活字版では、異なる年に印刷されたものが同版ということはありえないからです。

古活字版は、活字を組んで印刷していま

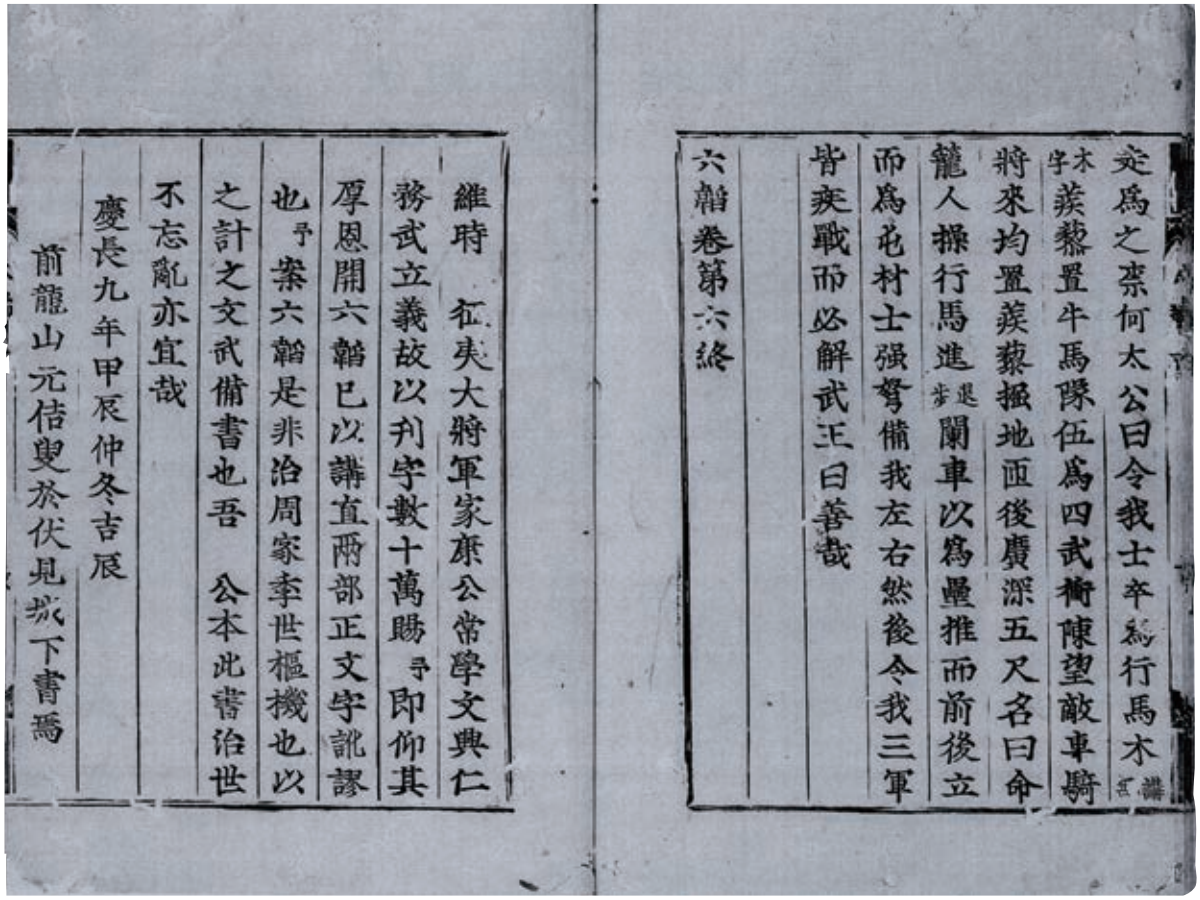


図5　慶長９年（二）版『六韜』
天理図書館所蔵（請求記号　399-イ17）

す。1丁分の活字を組んで必要枚数を印刷すると、その活字はバラされます。そして新しい丁の字組が行われ、印刷が終わると、またその活字はバラされます。その繰り返しで1冊の本が出来上がります。近代になると紙型を残すことで、活字版であっても後年に同版の印刷ができるようになりますが、古活字版の時代にはそういう技術はありません。たとえ同じ活字セットを使っても、全く同じ版面を再現することはなかったのです。同版ということは、つまり同じ時（活字の字組がバラされるまで）に印刷されたことを意味します。

それではなぜ刊語や跋の年記の異なる慶長9年と慶長11年のものが同版なのでしょうか。

まず考えられるのは、慶長9年に印刷した余部が残っていて、慶長11年に『七書』を出版するときに使われたという可能性です。

『六韜』については、その考え方でも説明できそうです。『七書』は全体の末尾に刊行経緯を記した跋を付すため、「六韜」に刊語をつける必要はありません。慶長9年（二）版『六韜』と慶長11年（一）版『七書』の「六韜」の違いは刊語の丁の有無だけで

走爲之柰何太公曰令我士卒爲行馬木（講武）
（木字）蒺藜置牛馬隙伍爲四武衝陳望敵車騎
將來均置蒺藜掘地匝後廣深五尺名曰命
龍人操行馬進（退歩）闌車以爲壘推而前後立
而爲屯村士强弩備我左右然後令我三軍
皆爽戰而必解武王曰善哉
六韜卷第六終

図6　慶長 11 年（一）版『七書』のうち「六韜」
公益財団法人東洋文庫所蔵（請求記号　三 -A-k-1）

すので、慶長9年（二）版の余部から不要な刊語の丁を取り除いて、慶長11年（一）版『七書』に組み入れたと考えても辻褄は合います。

しかし『三略』はその考え方では説明できません。慶長9年版『三略』と慶長11年（一）版『七書』の「三略」の違いは、刊語の丁の有無だけではなく、慶長11年（一）版の本文末に「三略終」の3字が加えられていることです。この3文字は本文の最終丁を印刷している間に（活字の字組をバラす前に）わざわざ活字を付け加えて[9]印刷したと考えられるのです。

問題は、なぜそのような手間をかけたかです。それは、本文末に書名を入れることで、刊語の丁をつけない形、すなわち『七書』の一部としても使える形としたかったからではないでしょうか。

つまり、慶長9年版『三略』を印刷している時に、すでに慶長11年（一）版『七書』の刊行が予定されていて、その一部としても使うことができるように、本文末に「三略終」と加えたバージョンが印刷されていたと考えられるのです。慶長9年(二)版『六韜』と慶長11年（一）版『七書』の「六韜」

が同版なのも、たまたま慶長9年（二）版『六韜』の余部があったということではなく、『七書』の一部としても使う予定で印刷されていたからではないでしょうか[10]。慶長11年（一）版『七書』の出版の完了は跋文に記される慶長11年であったとしても、その製作は慶長9年頃から時間をかけて行われていたと考えるべきなのかもしれません。あるいは、慶長9年（二）版『六韜』や慶長9年版『三略』の実際の刊行年は慶長9年よりも遅かったということなのかもしれません。現段階ではその事情について決定的なことを述べることは困難ですが、慶長11年（一）版『七書』の「六韜」と「三略」が、慶長9年のものと同じであることは、伏見版の製作の実態を考察する上で興味深い事実と思われます。

「見る」ことから始まる調査

冒頭にも述べたように、これは資料を「見る」だけで気が付くことができた事実です。伏見版は有名な古活字版で、優れた研究が数多く行われていますので、どうしてこのような事柄が見過ごされてきたのか不思議にも思われますが、各版の伝本が各地に散在して見比べるのが困難であったこと、参考書等に掲載される図版も部分的であり、特に『七書』は序や跋が取り上げられることが多く、「六韜」「三略」が紹介される機会が少なかったことが原因なのでしょう。

いまデジタル化が急速に進展し、多数の古典籍の画像がインターネット上に公開されるようになりました。自宅にいながら各地の古典籍の画像を自在に見ることができるのは、かつてなかった画期的なことです。もちろん原資料のもつ情報や魅力が、画像ですべて伝えられるわけではありませんが、デジタル化の進展は古典籍の調査に大きな可能性をもたらしているといえます。

さて、当館所蔵の古活字版もほぼすべてインターネット上に画像が公開されています。あなたも、まずは「見る」ことから始めてみませんか？

リサーチ・ナビ「国立国会図書館所蔵　古活字版目録」のページでも、古活字版について知ることができます。
https://rnavi.ndl.go.jp/jp/oldmaterials/Kokatsuji-ban.html

1　周の文王・武王の問いに太公望が答える形で記され、太公望の撰と伝えられる。
2　「黄石公三略」とも。漢の張良が黄石公から授かった太公望の兵法書とされる。
3　「武経七書」とも。北宋の時代に兵法書中の重要な7書をまとめたもので、「孫子」「呉子」「司馬法」「尉繚子」「三略」「六韜」「唐太宗李衛公問対」から成る。
4　閑室元佶が伏見の円光寺の開山となったことから、伏見版または円光寺版と称される。このほか、家康の命により慶長 10（1605）年に富春堂（五十川了庵）が出版した古活字版『吾妻鏡』も伏見版と称されている。
5　『右文故事』巻5など。（『近藤正斎全集』第 2, 国書刊行会 , 1905）https://dl.ndl.go.jp/pid/991309
6　『六韜』については慶長4年版のみ双行の注文（割書で小さく書き入れた注）が付されていない。
7　天理図書館所蔵本。原本は閲覧不可であった。この後高木浩明氏より叡山文庫本の所在をご教示いただき閲覧調査し、天理図書館所蔵本と同じく慶長 11 年（一）版と同版であることを確認した。
8　印刷博物館本は巻6の7丁が異版。
9　先に「三略終」を入れた形で印刷して、後で抜いたとも考えうる。
10　慶長9年（一）版『六韜』の版心（袋綴じの中央折り目部分）が「六韜巻一（～六）」の形式であるのに対して、慶長9年（二）版は「六韜一（～六）」であり、慶長 11 年（一）（二）版『七書』の諸書と同じ形式となっている。慶長9年（一）版の版心は慶長4年、5年版を踏襲しているが、慶長9年（二）版は『七書』の一部として版心の形式を変更したとみられる。なお『三略』の版心は慶長5年版「三略巻上（～下）」、慶長9年版「三略上（～下）」である。慶長9年版『三略』は1種類しか現存しないが、現存伝本は慶長9年（二）版『六韜』と版心の形も対応している。

※　＜　＞内は当館請求記号

伏見版『六韜』『三略』『七書』所蔵機関

書名	版種	所蔵機関	調査状況
六韜	慶長 4 年版	尊経閣文庫	○ a
		江戸東京博物館（浅野梅堂・陸軍士官学校旧蔵）	○ b
		阿波国文庫（現所在不明）	△ c
	慶長 5 年版	九州大学（田村専一郎旧蔵）	○ b
		足利学校遺蹟図書館　巻 1-3 のみ	○ d
	慶長 9 年（一）版	東洋文庫	◎
		慶応義塾大学斯道文庫	◎
	慶長 9 年（二）版	天理図書館（高木文庫旧蔵）	○ e
		印刷博物館　刊語なし	◎
		叡山文庫	◎
三略	慶長 5 年版	九州大学（田村専一郎旧蔵）	○ b
		足利学校遺蹟図書館	○ d
		栗田文庫（現所在不明）	△ c
	慶長 9 年版	当館　<WA7-22>	◎
		叡山文庫　巻上および巻中第 1 丁を欠く	◎
七書	慶長 11 年（一）版	東洋文庫（一橋家旧蔵）	◎
		龍門文庫（田安家旧蔵）　跋なし	◎
		当館　<WA7-78>　三略・六韜は補写	◎
		当館　<WA7-234>　尉繚子のみ	◎
		慶応義塾大学　孫子・呉子・司馬法のみ（舟橋秀賢加点）	○ f
		天理図書館　尉繚子・唐太宗李衛公問対のみ（舟橋秀賢加点）	△ e
		大英図書館　六韜のみ（舟橋秀賢加点）	△ g
		近畿大学　孫子・司馬法・六韜・唐太宗李衛公問対のみ	○ h
		安田文庫（叡山真如蔵・高木文庫旧蔵、現所在不明）	△ c
		安田文庫　（内野皎亭旧蔵、現所在不明）	△ c
		安田文庫　六韜欠（佐竹北家旧蔵、現所在不明）	△ c
	慶長 11 年（二）版	国立公文書館内閣文庫	◎
		祐徳稲荷神社	○ b
		明治大学	△ i
		大東急記念文庫　尉繚子のみ	△ j
		安田文庫　尉繚子欠、三略は活字を覆刻せるもの（現所在不明）	△ c

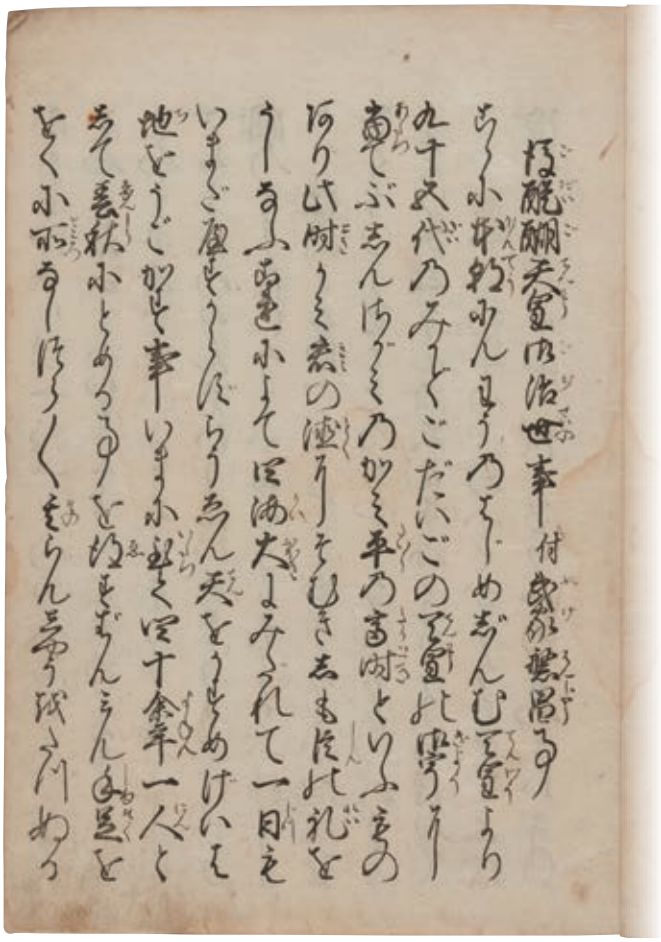
＊このほか、小城市立歴史資料館（小城市重要文化財）に慶長 11 年伏見版『七書』（版種未確認）がある。
＊慶長 9 年（二）版『六韜』のうち印刷博物館所蔵本は刊語が無いため慶長 11 年（一）版『七書』の一部であった可能性もある。

「調査状況」欄の◎は原資料の閲覧調査、○は画像、マイクロフィルム、複写物等によって全頁調査、△は参考文献により版種を判断したものである。
○、△には a ～ j を付記して調査に使用した資料やデータベースを示した。
a は『江戸幕府刊行物集成』（雄松堂フィルム出版 , 1987）<YD-345>
b は国文学研究資料館「国書データベース」https://kokusho.nijl.ac.jp/
c は川瀬一馬 著『古活字版之研究』増補版（日本古書籍商協会 , 1967）
https://dl.ndl.go.jp/pid/2974633
https://dl.ndl.go.jp/pid/2972407
https://dl.ndl.go.jp/pid/2972408
d は『足利学校遺蹟図書館所蔵貴重書集成』18（栃木県立足利図書館 , 1980）<YD1-373>
e は天理大学附属天理図書館 編『近世の文化と活字本』（天理ギャラリー , 2004）<Y93-H1307>
f は「慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション」https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja
g は川瀬一馬 , 岡崎久司 共編『大英図書館所蔵和漢書総目録』（講談社 , 1996）<UP121-G1>
h は「近畿大学貴重資料デジタルアーカイブ」https://kda.clib.kindai.ac.jp/rarematerials
i は印刷博物館 編『武士と印刷』（凸版印刷博物館 , 2016）<UE82-L24>
j は『大東急記念文庫貴重書解題 第 1 巻』（大東急記念文庫 , 1956）
https://dl.ndl.go.jp/pid/3002440

第58回貴重書等指定委員会報告

新たな貴重書のご紹介

国立国会図書館は、蔵書のうち、資料的価値が高いものなどを「貴重書」「準貴重書」に指定しています。[1] 令和5年2月15日、和漢書2点を貴重書に指定し、累計で貴重書は1325点、準貴重書は802点となりました。（貴重書等指定委員会）



巻頭

表紙

太平記 40巻

貴重書

<請求記号　WA7-301>

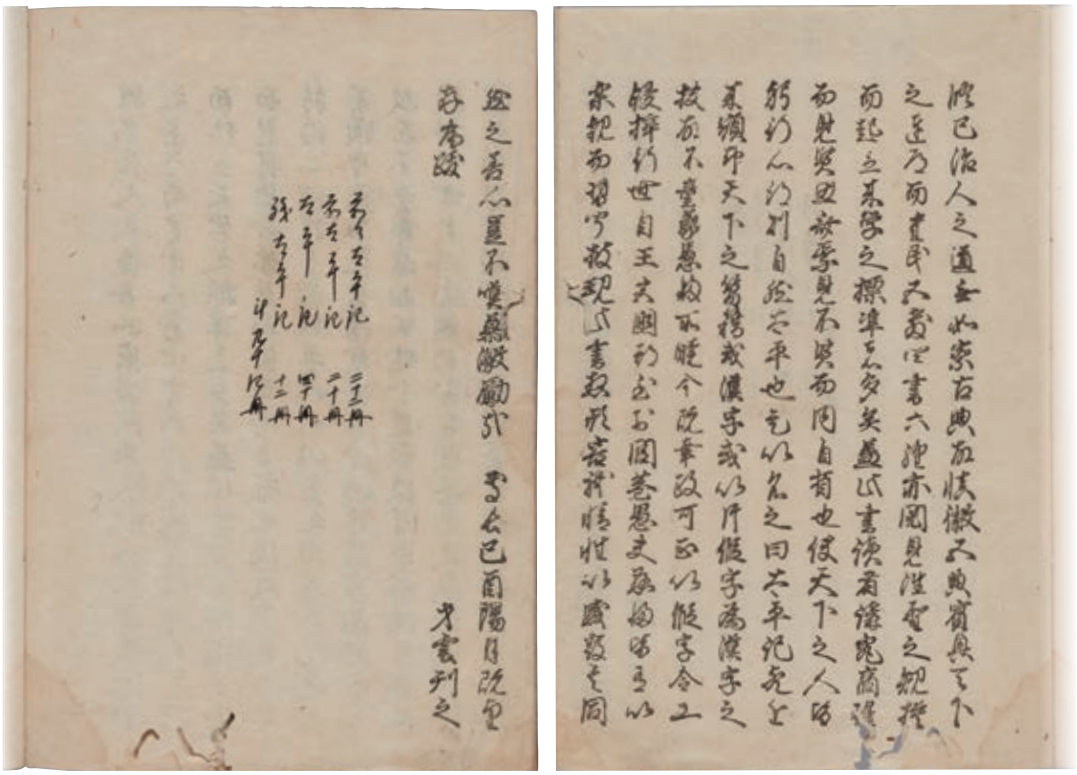
才雲　慶長14 [1609]

40冊　大きさ27.9×19.8cm

古活字版　跋・刊記に「慶長己酉陽月既望 / 存庵跋 才雲刊之」とあり　無辺無界　毎半葉10行 毎行20字内外　漢字平仮名交じり　振り仮名付き活字、濁点付き活字、訓点付き活字を使用　藍色紗綾型唐花模様空押し表紙（後補）　五つ目綴じ　乱丁:巻22の本文33丁と34丁、巻36の本文15丁と16丁　欠丁:巻12の本文57丁、巻14の本文29丁、巻34の本文18丁　補写:巻4の本文12丁、46丁、巻21の本文14丁　重複:巻35の本文10丁が2枚　印記: 鹿庭真島鸞藏所持、昭和拾四年拾月貳日

『太平記』は南北朝の戦乱を主題とした軍記物語です。江戸時代以前には歴史的事実を記した史書として読まれており、特に戦国時代の武将にとっては先祖や一門の武勲・功績の記録として、また治政と兵法の指南書として重んじられました。

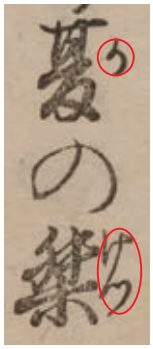
本書は江戸時代初期の慶長14（1609）年に出版された古活字版『太平記』です。『太平記』は古活字版の中でも特に出版回数が多く、慶長7年以降、漢字片仮名交じりの古活字版が何種類も刊行されていますが、平仮名交じりで出版されたのは本書が初めてです。巻末に存庵という人物（大坂に在住し、豊臣秀頼に仕えたと推定される）の跋文があり、漢文や



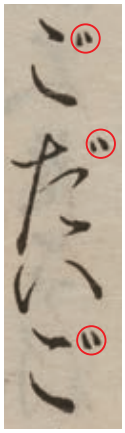
跋・刊記

漢字片仮名交じり文を読むのが難しい婦女子のために出版されたことが記されています。

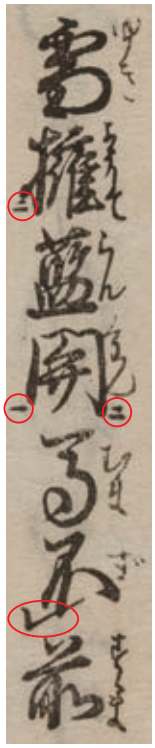
また本書は振り仮名付き漢字活字を最初に使用した古活字版として知られており、出版技術史上、意義を持つ資料です。今回貴重書に指定されたのは全40冊の揃い本ですが、伝本には端本が多く、完本は他には国立公文書館内閣文庫及び西尾市岩瀬文庫[2]の所蔵が知られるのみです[3]。



振り仮名付き漢字活字



濁点付き平仮名活字

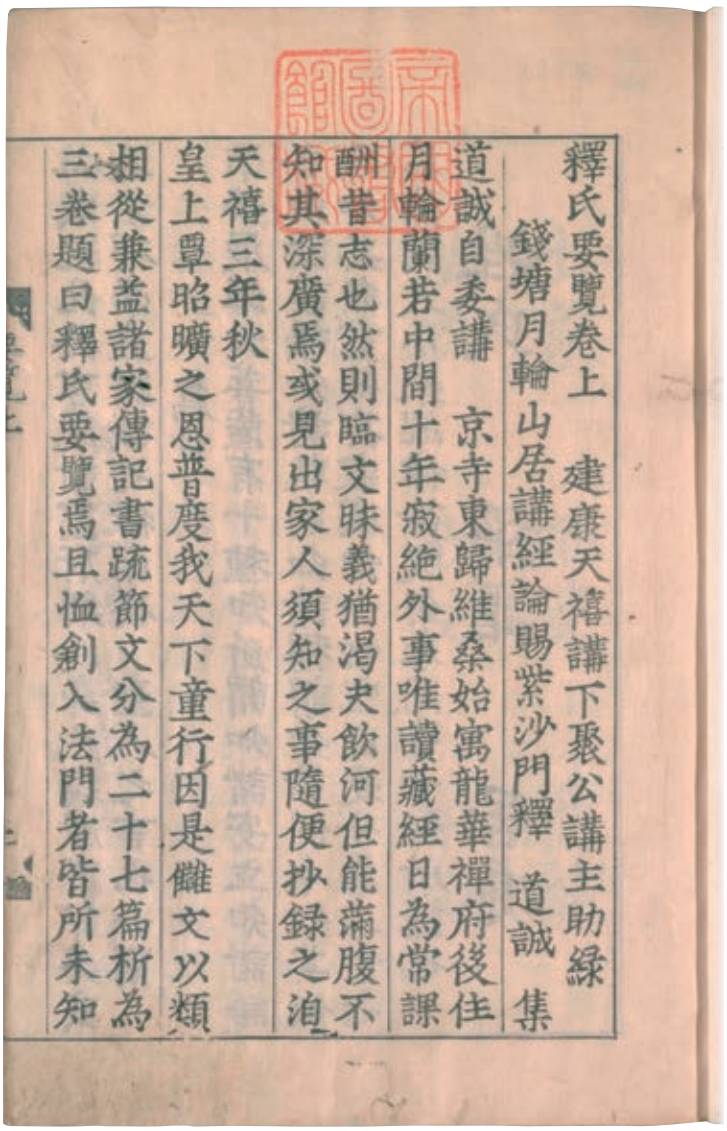


訓点付き漢字活字

振り仮名付き活字のほか、濁点付き活字、訓点付き活字も使用されている。
ここに挙げた例の使用箇所は以下のとおり。
振り仮名付き漢字活字：巻1序丁表
濁点付き平仮名活字　：巻1本文1丁表
訓点付き漢字活字　　：巻1本文19丁表
※「擁」「藍」「前」の活字は振り仮名付き。
（その他の振り仮名は手書き。）

1 「国立国会図書館貴重書指定基準」「国立国会図書館準貴重書等指定基準」の規定に基づき、館内の貴重書等指定委員会が行っている。
2 ただし巻35の1冊は同版の別本による取り合わせ。
3 今回貴重書に指定された資料は、巻4目録丁と巻20本文41丁が国立公文書館内閣文庫本、西尾市岩瀬文庫本とは異版である。

巻上表紙



巻上巻頭

巻上第56丁表
大きさの異なる3種類の文字が使用されている。

釋氏要覽 3巻

<請求記号　WA7-302>

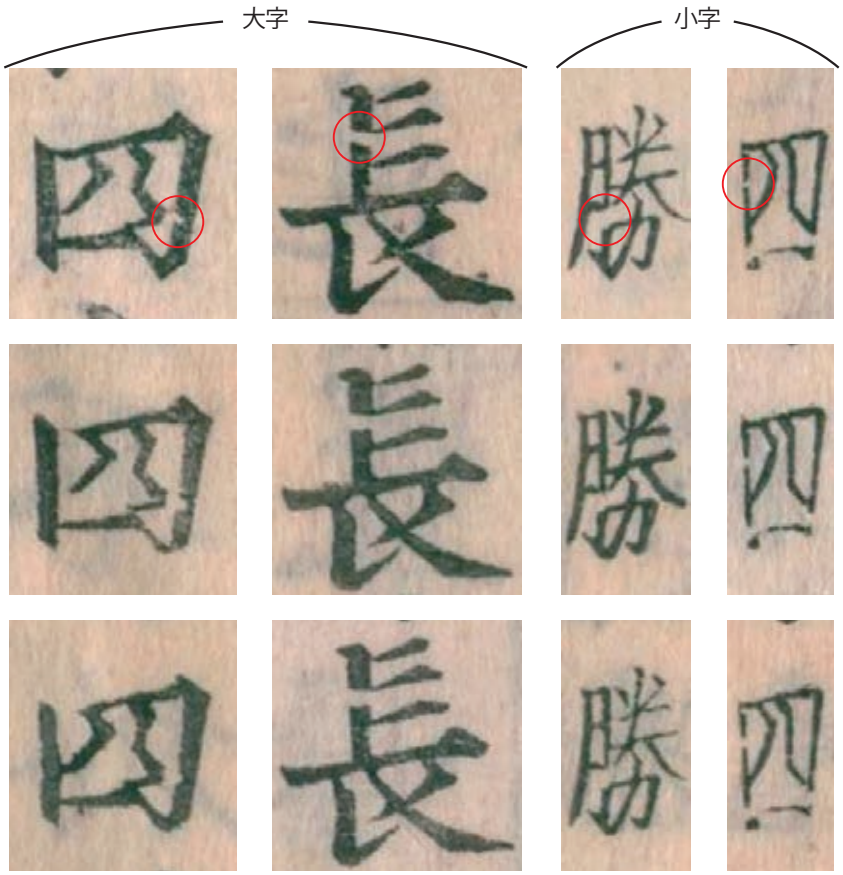
(宋) 釋道誠 撰　[慶長年間]
3冊　大きさ28.1×19.4cm

古活字版　四周単辺　有界　毎半葉5行　註文双行・疏文4行各毎行20字　上下花魚尾　白口　版心「要覽序(上、中、下)(丁付)」　第1冊見返しおよび第2・3冊遊び紙裏に「極性寺」、第2冊見返しに「□極」、第3冊見返しに「知恩寺久岸和尚形見/□極」と墨書あり　印記: 龜田文庫、帝國圖書館藏
https://dl.ndl.go.jp/pid/2610663

『釋氏要覽』は、宋の僧侶・道誠（生没年不明）が著した仏教用語解説辞典です。日本では南北朝時代の頃に五山版[4]が出版されたのを始めとして、江戸時代初期には数種類の古活字版が、寛永年間（1624～1644）以降には古活字版を底本とした整版（版木で印刷した本）が盛んに出版されました。

今回貴重書に指定された『釋氏要覽』は、従来整版だとされてきました。[5]しかし、当該本では、同じ傷のある文字（欠損字）が何度も出てくるのが観察されます。これは活字を組みかえて複数の丁を印刷するために起きる現象であり、古活字版を見分ける際のポイントのひとつです。この本は古活字版であると考えられます。[6]

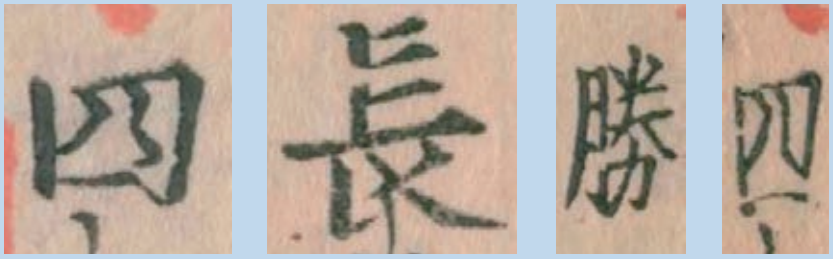
本書に刊記はありませんが、同版と考えられる大英図書館所蔵本には慶長15（1610）年の書入れがあります。[7]また本書の欠損字には、慶長17年刊古活字版『佛祖歴代通載』（当館請求記号　WA7-218）にみられる欠損字と同じものが複数あり、両書の間で活字の使いまわしが行われたこと



古活字版『釋氏要覧』の活字

古活字版『釋氏要覧』には、項目の極大字（毎半葉5行）、註文の大字（極大字に対して双行）、疏文（註をさらに解釈したもの）の小字（大字に対して双行）の3種類の活字が使用されている。ここでは大字と小字から例を挙げた。
それぞれの本文での使用箇所は以下のとおり。
大字の四：上から巻上第5丁表5行目、巻中第14丁表5行目、巻下第46丁表5行目
大字の長：上から巻上第52丁裏4行目、巻中第6丁裏4行目、巻下第37丁表4行目
小字の勝：上から巻上第56丁表5行目、巻中第20丁表1行目、巻下第33丁裏1行目
小字の四：巻上第62丁裏4行目、巻中第8丁表3行目、巻中第10丁裏3行目

※表示の行数はすべて半葉5行を基準にしている。



巻7第6丁表10行目　巻4第11丁表4行目　巻1第7丁裏1行目　巻22第4丁裏10行目

古活字版『佛祖歴代通載』の活字

古活字版『佛祖歴代通載』は毎半葉10行毎行19字、本文の大字と註文の小字（大字に対して双行）の2種の活字を使用する。

が推定されます。本書の刊行年代は慶長年間と考えてよいでしょう。

古活字版『佛祖歴代通載』は本国寺[8]で刊行されたものです。本書は本国寺版の研究にも新たな光を投げかける重要な資料といえます。

4　鎌倉時代中期から室町時代末期にかけて、京都・鎌倉の五山を中心とした禅宗関係者によって出版された書物をいう。中国の宋・元・明版、朝鮮版を覆刻、模倣したものが多い。
5　本文を囲む枠の四隅には古活字版の特徴である隙間が見られるが、これは文字部分を整版で作り周囲を古活字版の枠線で囲んだものと解釈されていた。（川瀬一馬『古活字版之研究』増補版, 日本古書籍商協会, 1967, p.783 https://dl.ndl.go.jp/pid/2972407/1/63）
6　高木浩明氏は、「欠損活字を探せ！」（『日本古書通信』1123, 2023.2<請求記号　Z21-160>）において、当該本が古活字版であることを論証する過程について解説している。
7　Kenneth B. Gardner "Descriptive catalogue of Japanese books in the British Library printed before 1700"（Tenri Central Library, 1993<請求記号　UP72-A257>）。川瀬前掲書p.783に「この書の一本の奥に慶長十五年の墨書識語があるものもあつて、刊行年時を限定する」とあるものと同一本と思われる。
8　京都の日蓮宗寺院。文禄4（1595）年刊『天台四教儀集解』『法華玄義序』を皮切りに寛永頃まで古活字版を刊行した。

資料の入口はこちらです

館内スコープ

当館の蔵書となるため送付されてきた出版物。

毎朝運び込まれる、大量の封筒や段ボール、折りたたみコンテナ。その梱包を解くと、姿を現すたくさんの本や雑誌……。

国立国会図書館では、さまざまな資料を所蔵しています。主に納本という制度によって国内の出版物を網羅的に集めていて、実際に出版物が図書館に到着する様子はなかなか壮観です。

国内資料課収集第三係の担当業務のひとつは、納本された出版物に対して代償金の支払い処理を行うことです。代償金というのは、納本された出版物について申請があった場合に小売価格の半額程度を支払うものです。書店で販売している本の多くは取次業者を経由してまとめて納本されてくるので、みっちりと本が詰めこまれた折りたたみコンテナを職員が開梱し、破損などがないか、既に所蔵している資料と重複していないかを確認していきます。この作業は新刊書のシャワーを浴びているようで、個人的に楽しみな時間です。じっくりと読むような時間はありませんが、最近はこんなテーマが流行りなんだ、とか、この表紙かわいい！　といった小さな発見があります。この確認作業を経て正式に図書館の資料になり、代償金支払いの手続きに進みます。

係で担当するもうひとつの業務は、資料の購入です。古典籍や文書類、納本制度が始まった昭和23（1948）年より前に刊行された資料などを古書店から購入しています。これらは発行年代が古く、扱いに注意が必要だったり、高価な資料であったり、新刊書とは違った面を持っています。どのような人が持っていたのだろう、きっとこの本を大事に思って保存していた人がいたんだな、とその資料の来し方を思うと、感慨深いものがあります。また、利用が多い資料や事典などの参考資料は、納本され書庫に保管される資料とは別に館内の専門室に配置されることもあるので、そのための資料を購入することもあります。こちらは発行年代も新しく、利用者が一番に手に取りやすいところに置かれる資料なので、活躍を期待して送り出すことになります。

広く資料を収集して所蔵することが、利用してもらうことにつながります。資料の入口での業務を通じて、資料を集めることの意義を感じる毎日です。

（国内資料課 収集第三係　本との遭遇）

本屋にない本

岡山の野鳥たち
～むかし・いま・みらい～
倉敷市立自然史博物館
第27回特別展図録

倉敷市立自然史博物館 刊
2018.7　58p ; 26cm
<請求記号 RA567-L457>

野鳥は、「今、そこにいる恐竜」である。羽毛や翼や二足歩行といった特徴は、祖先である恐竜の時代から有する「恐竜らしさ」といえる。その一方、歯のないくちばしは、かつての恐竜には見られない、進化の過程で獲得された「鳥らしさ」である。いつから恐竜は鳥になったのか、鳥と恐竜の間に明確な境界線などないのである――

このような魅力的な話題からはじまる本書は、2018年に倉敷市立自然史博物館で開催された特別展「岡山の野鳥たち～むかし・いま・みらい～」の図録である。全58ページとコンパクトながら、岡山県に生きる小さな〝恐竜〟について、様々な角度から知ることができる本である。

まずページをめくると、県内の遺跡から出土した鳥類の化石や、江戸時代に岡山藩が領内の動植物についてまとめた『備前国備中国之内領内産物帳』が紹介され、縄文時代から江戸時代にかけて当地でみられた野鳥についての手がかりが得られる。江戸時代には、現在ではほとんど見ることのできないコウノトリやツルもいたようだ。なお、この岡山藩の産物帳は本帳と絵図帳からなり、絵図帳は岡山大学附属図書館の「池田家文庫絵図公開データベースシステム」によりウェブサイト上で自由に見ることができる。

現在の野鳥については、2018年時点において県内で確認された379種のうち数十種について、地元の野鳥愛好家らによる解説と写真がトピックごとにまとめられている。里山の荒廃が一因で近年に激減したヨタカやサシバ、都市の環境に適応するイソヒヨドリ、餌やフン等による景観への悪影響が問題となったササゴイ、巣箱の設置による保護活動が行われているブッポウソウなど、野鳥と人の共存をめぐる多様な状況が分かる。中でも、山林の手入れ不足が一因で鬱蒼とした暗い森を好むキビタキが見られるようになったことについて、かつては見ることが難しかった鳥に出会える機会が増えたことを喜びつつも、それが人と林の関わりの希薄化によるものであることを残念に思う野鳥観察者の複雑な心境が綴られているのが印象的であった。また、西日本で初めてとされるジョウビタキの繁殖を目撃した際の臨場感あふれる様子や、工事中の人工島でツクシガモの群れを発見した記録など、個人の観察に基づく記述からは、野鳥の様子とともに観察者の高揚まで伝わってくる。野鳥への愛に溢れたリアルで素朴な解説は、本書の大きな魅力である。

ところで、表紙と裏表紙には175種類の野鳥の顔が描かれており、「野鳥顔図鑑クイズ」が楽しめる。「サギ」と名の付く鳥だけで5種類、「カモ」にいたっては20種類もいる。野鳥観察が好きな方はぜひ挑戦してみてほしい。

（勝田　真紀子）

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。
このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

国際子ども図書館展示会「世界をつなぐ子どもの本―2020年国際アンデルセン賞・IBBYオナーリスト図書展」

国際子ども図書館では、7月25日（火）から9月3日（日）まで、展示会「世界をつなぐ子どもの本―2020年国際アンデルセン賞・IBBYオナーリスト図書展」を開催します。

この展示会では、2020年の国際アンデルセン賞受賞者のこれまでの諸作品、IBBY（国際児童図書評議会）オナーリスト（推薦図書リスト）の掲載作品とその邦訳書、あわせて約200冊を手にとってご覧いただけます。

○開催期間　7月25日（火）～9月3日（日）
　※月曜日、8月11日（金・祝）、8月16日（水）は休館
○開催時間　9時30分～17時
○会場　国際子ども図書館 レンガ棟3階 ホール

国際アンデルセン賞は、1956年に始まった国際的な児童文学賞で、2年に一度、IBBYから児童文学の分野で卓越した業績をあげた現存の作家と画家に対して贈られています。2020年はジャクリーン・ウッドソンさん（アメリカ合衆国）が作家賞を、アルベルティーヌさん（スイス）が画家賞を受賞しました。

IBBYオナーリストは、IBBYが隔年で作成する推薦図書リストです。作成に当たっては、IBBYの各国支部が、自国で新たに出版された児童書の中から外国に紹介したい作品を選ぶことになっています。「文学作品」、「イラストレーション作品」、「翻訳作品」の3部門から成り、2020年は世界の国と地域から179作品が選ばれました。日本からは、文学作品部門に梨屋アリエさんの『きみの存在を意識する』、イラストレーション作品部門にたむらしげるさんの『よるのおと』、翻訳作品部門に西村由美さん訳の『青い月の石』が選ばれています。

○問合せ先
　国際子ども図書館 資料情報課 展示係
　電話　03（3827）2053（代表）

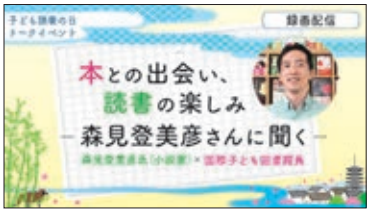
「世界をつなぐ子どもの本―2020年国際アンデルセン賞・IBBYオナーリスト図書展」ちらし

子ども読書の日トークイベント「本との出会い、読書の楽しみ―森見登美彦さんに聞く―」録画配信

4月22日（土）に国際子ども図書館で開催した、子ども読書の日トークイベント「本との出会い、読書の楽しみ―森見登美彦さんに聞く―」の録画をYouTubeの国立国会図書館公式チャンネルで公開します。

小説家の森見登美彦さんに、子ども時代の読書経験、思い出に残る本、読書と創作との関係、子どもたちに伝えたい読書の魅力などについて語っていただきました（聞き手：国際子ども図書館長）。

○期間　令和6年3月31日（日）まで
○対象　中学生以上を対象としますが、期間中はどなたでもご覧いただけます。
○申込み　不要
○問合せ先
　国際子ども図書館 企画協力課 広報係
　電話　03（3827）2053（代表）



子ども読書の日トークイベント録画配信

令和5年度資料保存研修

国内の各種図書館員等を対象に、資料保存に関する基礎的な知識と技術の習得を目的として、資料保存研修を実施します。

○日時　9月28日（木）、29日（金）
各日9時30分～16時30分（各日とも同じ内容です。）
○会場　東京本館 新館3階大会議室
○対象　国内の公共図書館、大学図書館、専門図書館等に勤務する方
○内容　実習：①無線綴じ本を直す②簡易補修
講義：図書館資料の保存
○持ちもの　えんぴつ、エプロン

令和元年度資料保存研修の様子

○定員　40名（各日20名）
1機関からのお申込みは1名までとし、申込多数の場合は調整させていただきます。
○申込期間　7月11日（火）10時～28日（金）17時
○申込方法　当館ホームページをご覧いただき、参加申込みページからお申し込みください。
ホーム＞資料の保存＞保存協力＞おもな研修会や講演会のテーマ・記録等＞令和5年度資料保存研修
https://www.ndl.go.jp/jp/preservation/cooperation/training_r5.html
※7月11日（火）に公開予定です。

○問合せ先　収集書誌部 資料保存課
電話　03（3506）5219（直通）
電子メール　hozonka@ndl.go.jp

「国立国会図書館オンライン」及び「国立国会図書館サーチ」のリニューアルについて（令和6年1月予定）

国立国会図書館では、現在提供している「国立国会図書館検索・申込オンラインサービス（国立国会図書館オンライン）」及び「国立国会図書館サーチ」を統合・リニューアルし、令和6年1月に新たなウェブサービス「国立国会図書館サーチ」として公開予定です。
リニューアルに関するお知らせは、当館ホームページで随時公開していきます。

新刊案内

レファレンス　869号

「フランス2030」―長期産業計画の概要と展望―
家計への所得移転策と出生率との関係に係る理論と実証―フランスの所得税におけるN分N乗方式を中心に―
スポーツ選手の肖像とスポンサーシップ

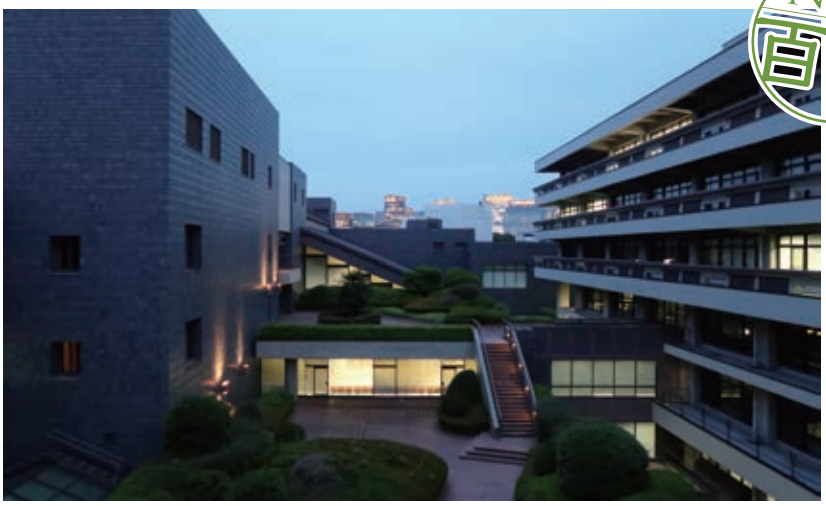
A4　73頁　月刊　1,100円（税込）
発売　日本図書館協会

カレントアウェアネス　356号

学術雑誌のアクセシビリティ：現状と課題
ニューノーマル時代に対応したラーニングコモンズと学習支援のリデザイン―コロナ禍での対応からの示唆―
北米におけるデジタル・ヒューマニティーズと日本研究の現状：発展、協働、そして課題
<動向レビュー>
オープンサイエンスをモニタリングする機関向けダッシュボードとその提供指標：OpenAIREを例として
「わざわざ系本屋」の系譜―多様化する本屋と、そこに注がれる眼差し

A4　20頁　季刊　440円（税込）
発売　日本図書館協会

入手のお問い合わせ
日本図書館協会
〒104-0033　東京都中央区新川1-11-14
電話　03（3523）0812



NDL百景

＃37
東京本館 中庭夕景
（2018年6月）

7/8

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN 2023.7/8

NO.747/748
JULY/AUGUST
2023

CONTENTS

01 <Book of the month - from NDL collections>
Nyobo sanjurokkasen: A growing passion for education in the Edo period

05 *Kokatsuji-ban* (old movable-type printed books)

06 What are *Sagabon*? KOAKIMOTO Dan

16 The Fushimi editions of *Rikuto*, *Sanryaku* and *Shichisho*

24 58th Committee on Designation of Rare Books
Materials recently designated as rare books

28 <Tidbits of information on NDL>
This is the entrance for materials

29 <Books not commercially available>
Okayama no yachotachi: Mukashi・ima・mirai

30 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

発行所 国立国会図書館
編集責任者 川西晶大

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03（3581）2331（代表）
FAX 03（3597）5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
https://www.ndl.go.jp/

令和5年7/8月号（No.747/748）
令和5年7月1日発行

印刷所 株式会社 丸井工文社

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を転載する場合（全文または長文にわたり抜粋する場合、または図版を転載する場合）には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ（https://www.ndl.go.jp/）＞刊行物＞国立国会図書館月報でご覧いただけます。

ISSN 0027-9153

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN

2023.7/8

国立国会図書館
National Diet Library, Japan

国立国会図書館